

「森銑三刈谷の会」だより 41(2025/4/19)

発行 2025/4/19 (月刊・メールでの投稿歓迎)

バックナンバー 刈谷市中央図書館>森銑三刈谷の会

例会 第3土曜日 14:00-16:00 市中央図書館 参加自由

共同代表 神谷磨利子・鈴木 哲 tetsu_s@katch.ne.jp

表 第41回 配布資料

資料番号	資料情報
(1)	長岡市双書No.60(2021)「反町茂雄の事績」『古書肆弘文荘・反町茂雄と長岡』pp.8-9、長岡市
(2)	森銑三(1934)「後記」『近世文藝史研究』、弘文荘
(3)	森銑三(1994)「読書日記」『森銑三著作集続編』第14巻、(昭和9/3/30、5/14、昭和10/3/14、昭和12/10/29、昭和13/9/26-27、10/12)、中央公論社
(4)	高木浩明(2024)「古活字探偵事件帖24反町茂雄と森銑三」『日本古書通信』2024年12月号、pp.22-23、日本古書通信社
(5)	反町茂雄(1998)『一古書肆の思い出』4、pp.24-31、平凡社
(6)	森銑三(1975)「随筆書の解題」『思ひ出すことども』、pp.136-138、中央公論社
(7)	反町茂雄(1998)『一古書肆の思い出』5、pp.17-20、平凡社
(8)	長野英夫(1986)「森銑三さんの一通の手紙」『ももんが』森銑三氏追悼特輯、30巻4月号、pp.42-43、乙骨書店
(9)	反町茂雄(1986)「森さんと弘文荘」『ももんが』森銑三氏追悼特輯、30巻4月号、pp.43-46、乙骨書店
(10)	反町茂雄(1988)「カード取りの森さん」愛蔵版『森銑三著作集』第1巻月報1、pp.1-2、中央公論社

41:2025/3/15(土)「反町茂雄『一古書肆の思い出』に見る森銑三の弘文荘時代」参加10人 神谷 磨利子

『森銑三著作集』索引に「反町茂雄・弘文荘」(ママ)が出ているのはわずかに続編に10回のみである。それも昭和9年3月から13年10月までの「読書日記」記述を主とする。昭和9年3月30日の日記には、弘文荘で海量法師の自筆日記を見た旨が書かれている。そして「海量法師の古今集論」(1934.9)に海量自筆の日記が弘文荘に売物に出ていることを「吹聴しておかう」(『森銑三著作集続編』7巻p.170)と書いている。

昭和20年4月の空襲で焼け出された森銑三が22年9月末、52歳の時に旧知の反町茂雄に出遭い、弘文荘に勤めるようになったいきさつを、反町の『一古書肆の思い出』、『ももんが』森銑三氏追悼特輯、愛蔵版『森銑三著作集』第1巻月報1の3種類の文章で読み合わせた。反町が多くを語るのに比して、銑三の口調は淡々としている[資料(6)]。1934年の『近世文藝史研究』後記[資料(2)]や「海量法師の古今集論」の記述とは違って、抑えた表現である。反町の「カード取りの森さん」[資料(10)]によると、入社時に反町は、カード取りの仕事の責任は全部自分が取り、良かれ悪しかれ森の名を出すことはない旨を伝えていた。銑三もまたこの申し出に応えるために、弘文荘のこと、反町のことを書かないと自戒していたのではないだろうか。銑三の律儀な人柄が見える。

高木浩明氏の「古活字探偵事件帖 24 反町茂雄と森銑三」『日本古書通信』2024年12月号で、「森銑三刈谷の会」の活動を紹介していただいた。

会の当日3月15日に、偶然のことながら、森銑三夫人の姪のKさんから2年ぶりにお電話をいただいた。銑三夫妻が空襲で焼け出され身を寄せていた石井鶴三はKさんの大叔父にあたる。本会の活動を見守ってくれる力を感じ、身の引き締まる思いがした。石井鶴三もいつか話題にしたい人物である。

反町茂雄『一古書肆の思い出』から

飯田 芳子

私が森銑三という偉大な学者に少なからず心を動かされたのは『一古書肆の思い出』と言う反町茂雄の著作に出会ったことによる。ものにこだわらぬ性格、ひたすら書物を極めようとする学究の徒としての偉大さをそこに読み、得られたこと。反町茂雄は岩波茂雄のような出版業を志していたというだけに、昭和9年に森銑三から相談を受けた出版の話が本人(銑三)の意図していた少冊から『近世文芸史研究』と言う大冊へという流れになったのは、森銑三『近世文芸史研究』後記にある通り自然な成り行きだったのだろう。資料(3)の森銑三「読書日記」を読んでも二人の交流の主たるものをうかがい知ることができる。こうした関係が資料(5)の『一古書肆の思い出』4に言う戦後の出会い

としてすでに承知の二人を結びつける定められた運命の糸のごときものを感じさせた。ここで語られる反町茂雄の思い出の端々に宝石のように鑲められたエピソードとして私は読み感激したものである。それからの二人の交流・関係は言わずもがなである。『日本古書通信』[資料(4)]紹介の、今では龍村織物でしか織られていない蜀紅錦や唐草模様の秩の題簽の文字もしくり、桐箱の題簽の文字に目をとめた三成重敬氏が森銑三の手になるものと聞かされて森の人となりを物語る表現は心温まるものであった。資料(8)の森銑三さんの一通の手紙(長野英夫)・カード取りの森さん・『日本古書通信』高木浩明氏の「反町茂雄と森銑三」など豊富な資料を得られたことは今回特筆すべきであろうと思う。

森と反町「水魚の交わり」と納得「オープンドバイ」 鈴木 哲

森の「私は何でもやります」など森銑三(1895-1985)と反町茂雄(1901-91)の同一事象に対する異なった見方が興味深い。異なる人格であるから当然と言えば当然である。森なくして反町なく、反町なくして森なし、森の反町か、反町の森か、の感がする。劉備玄德と諸葛亮孔明との「水魚の交わり」を思い起こさせる。

長野英夫(1986, p. 42)の「オープンドバイの英字のセロテープ」は意味がつかめなかった。話し合う中で Open Dubai(開かれたドバイ?)ではなく、opened by (開封された)の意味と理解することができた。

毅然とした銑三さんの態度

山田 宇多子

同じ時期の銑三さんの様子をいろいろな方向から繰り返し知ることができ、立体的に銑三さんのことが目に浮かんできました。

心の中に自分に対する自信と誇りを持っていて、客観的にはずいぶん助けてもらっていても、諂う気はさらさらなく毅然としている人だったのだと思いました。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

銑三さんを知る豊富な資料

神谷 明子

銑三さんの人となりが、反町さん、高木さん、長野さん方の文章という豊富な資料に基づいたお話から確かなものになっていったと思います。お三方の文章から銑三さんの生活、仕事ぶり、反町さんの銑三さんを尊敬されていることがよく分かりました。

反町さんも素晴らしい方ですね。改めてネット検索して分かりました!!日本の古書を取り扱い、古書を守り、存在を知らせ、文化財にされた。銑三さんや古書を守ってくださり、ありがとうございます。

銑三さんの人間的魅力

河橋 育実

銑三さんは人との繋がりや強運を引き寄せる方だと思います。往来で偶然会った知り合いに「仕事を紹介してください」って言った翌日に雇ってもらえるんですものね。しかもそれから約 40 年も！ 銑三さんの仕事ぶりが良いからだと思いますが…

カードの作成は銑三さんの得意分野で銑三さんも楽しんでお仕事をされていたのだらうと思います。

弘文荘入店時の銑三さんは江戸時代版本の若干と名家自筆本の一部は明るい、万葉集・竹取・源氏等の鎌倉時代・足利時代の古写本は暗く[資料(9)]とあり、人間的に魅力が増した様に感じました。

2025/4-5 予定

42:2025/4/19(土) 第1会議室：神谷磨利子「森銑三(1895-1985)と柴田宵曲(1897-1966)——『柴田宵曲翁日録抄』(『日本古書通信』)を中心に」〈関連行事〉2025/4/20(日)大会議室：刈谷市郷土文化研究会 2025年度総会、14:00- 研究発表 鈴木哲「天気の良い日は[フレイル予防に]論文を書こう：<杉浦日向子は森銑三を敬愛していたか>など」

43:2025/5/17(土)2階展示コーナー：村瀬典章氏解説「森銑三生誕 130 年没後 40 年展」

今後の話題 長瀧秀雄「服部長七」

*発表者を募集しています。ぜひお声かけください。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆